ローバート・G・エンメンス著 足達左京訳

クレムリンの客

Robert G.Emmens

GUESTS OF THE KREMLIN

クレムリンの客

ロバート・G・エンメンス著
足達左京 訳

《訳者略歴》

足達左京（あだち　さきよう）

1905年　福岡市に生まれる
1927年　旧制第五高等学校卒業
1930年　京都大学理学部地球物理学科卒業
1931年　神戸高等商船学校教授
1939年　海軍水路部に入り天気予報を担当
1943年　海軍の風船爆弾の開発に従事
1945年　木更津の第三航空艦隊で終戦
1954年　日本電建株式会社入社
1964年　退職し戦史の研究に従事
1976年　渡米し，日本のアメリカ本土攻撃の跡を訪ねる

著訳書　『風船爆弾大作戦』（学芸書林），『東京初空襲』（彩流社）
住　所　東京都目黒区柿ノ木坂2—11—3

クレムリンの客

一九八四年八月二〇日　印刷
一九八四年九月　五日　第一刷発行

定　価　一八〇〇円
著　者　ロバート・G・エンメンス
訳　者　足達左京
発行者　竹内淳夫
発行所　株式会社　彩　流　社
〒102 東京都千代田区富士見二—二—二
電話〇三（二二三四）五九三一（代）
振替　東京九—五五二三九

装幀者　原田健作
印　刷　明山印刷・高陽社・文化印刷
製　本　青木製本

乱丁・落丁本はお取かえいたします
0094—915—2900

日本語版への序文

ジェームス・H・ドーリトルの指揮の下に、日本の重要都市を爆撃した東京空襲部隊から離れて、我々の飛行機はソビエト領に不時着した。そこで我々は抑留され一年二カ月を過ごすことになった。東京空襲に参加した乗組員の数人が日本において銃殺されたり、収容所で受けた信じられないような拷問のショッキングなニュースに比べると、本書に書いたものは、その血なまぐさい獣性に関しては全く問題にならないであろう。また、その比較をここで述べようという意図は全くない。

我々五人に対する直接的肉体的な拷問は、我々を直接管理下においたクレムリンからの命令によって、全くなされなかったことを幾度か神に感謝したものである。

この本は、四十年も前の出来事を書いたものであるが、ソビエトが我々五人のアメリカの飛行士、詳しく言えば、彼らと共にナチに対して戦っていた連合軍の兵士に対して、どんな風に応待したかを述べることによって、ソビエト人の生活の様子、心の動き、政府の生産の状態——つまり、当時のソビエトの庶民の生活を現わそうと考えたのである。

私は一九五八年から一九六一年まで在日アメリカ大使館のスタッフとして東京で四年間の楽しい生活を送った。その日本で私の記録が出版されることになり、訳者の足達左京氏、および彩流社の

スタッフの皆さんに感謝したい。

一九八四年五月

ロバート・G・エンメンス

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次／クレムリンの客

日本語版への序文
第一章　東京初空襲　9
第二章　ロシアへ不時着　33
第三章　抑留　66
第四章　シベリア鉄道の旅　90
第五章　ロシア軍の後退の中で

第六章　別　離　151
第七章　スターリンへの手紙　177
第八章　移　動　202
第九章　脱出計画　227
第十章　ペルシアへ　262
訳者解説にかえて　293

訳文中の（　）は著者によるもの、［　］は訳者が訳註としていれたものである。

クレムリンの客

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第一章　東京初空襲

「X作戦」

ヨークは縦揺れしているホーネットの甲板の艦首に立っている信号兵の旗を見詰めながら「畜生！　このスロットル〔飛行機の絞り弁〕の柄は元に戻らないぞ」と怒鳴った。信号兵の腕が上げられ、まさに「発進」の合図がなされようとしていた。この合図で今までに、B25七機は次々と灰色の北太平洋を横切って、東京及びその周辺都市へと繰り出したのであった。

私はフロリダのエグリン基地〔陸軍航空基地〕で行われていたB25を空母のデッキから離陸させる特別の訓練に参加していなかったし、息詰まるような滑走距離一二〇メートルでの離陸訓練を、この時までに一度も見たことがなかった。私はサウス・カロナイナ州のコロンビア基地で、中隊長ジョーン・A・ヒルガー少佐が「X任務」から帰って来るまで、隊務をみることだとばかり思っていたのである。

ところが、エグリン基地での訓練の最終日に、任務につくはずのB25爆撃機のうちの一機を任務から外さねばならない事故が起ったのであった。

その事故は、エグリン基地にいたニューヨーク州のバタビア、サン・アントニオなどで予備部隊の作戦将校をしていたE・J・ヨーク大尉からコロンビア基地にあったドーリトル中佐〔ジェームス・H・ドーリトルはこの作戦の指揮官で、一番機の機長であった〕不在中の東京空襲部隊の総司令部に電話があって知らされた。空母に積み込むため、もう一機を追加させるよう西海岸まで飛ばしてくれないか、との要請であった。その一機を私自身で準備することになったが、それには大して時間はかからなかった。

エグリン基地での訓練期間中、任務に対する機密が厳しく守られていたので、私はそれがどんな任務かは全く知らなかった。もっともその頃、部品や装備を取りに来たり、私用を処理するために数人がコロンビア基地にやって来たのではあったが。彼らは自分たちが何をやってるかについては、完全な沈黙を守ることが必要なのだと厳重に申しつけられていたのであった。しかし、彼らがやっている特種の離陸作業や任務の標的――その中には東京もあった――についての噂さは、コロンビアの我々の耳には入って来ていたが、その可能性については疑念がもたれていた。しかし、私が一九四二年の三月二六日にコロンビアを立った時には、標的がどこだかは、判然とは知らなかった。

エグリン基地では空襲部隊の乗組員がヨークを待ちうけていた。私は副操縦士として飛んだ。ノーラン・A・ヘルンドン中尉が航空士で、整備士がT・L・ラーバン軍曹、ダビット・H・ポール伍長が尾部の射撃手であった。我々が西部海岸へ向う飛行中、ヨークが、「さーて、君はずっとこの任務につくつもりかね」と言った。

私は彼が「X任務」のメンバーに入っていないことを知っていたのだが、「ええ、貴方も行くの

でしょう」と尋ねた。

「そう」とヨークは言って、「私はドーリトルをよく知っているんだが、向うに着いて彼の所に話しに行くと、彼はきっと我々を最終任務につけるだろうと思うよ」とつづけた。

サンフランシスコの東岸にあるアラメダ基地に着くと、そこに錨泊していたホーネットにはすでに巨大なクレーンが妙な積荷を甲板に積み上げていた。荷役桟橋にいたドーリトル中佐はそこの空港に着陸し、クレーンの所まで移動されて来る各機を一機ずつ自分でチェックしていた。

スキー・ヨークと私は直ぐに彼の所に行くと、ヨークは私をドーリトルに紹介した。私はこの任務がどうしても成功させなければならぬものだということを、よく知っていたので、何故に彼のような個性の持主がこの任務に必要であるかが直ぐに了解できた。この空襲の参加者全員に対しては、最高の士気と規律と信頼――指揮官への信頼、飛行機への信頼、特に大切なのは彼ら自身への信頼――これらの信頼を彼らに持たせ得るのは彼の有するすばらしい性格であるからであった。

ドーリトル中佐は我々に作戦参加を要請した。そして一九四二年四月二日、ファンファーレもなしに、静かに湾を出て行くホーネット艦上から、我々は朝日がサンフランシスコの地平線にさんさんと降り注ぐ光景と巨大な鉄橋を眺めていたのである。金門橋を過ぎると、ホーネットはその艦首を「日出ずる国」へと向けた。我々の標的が「東京だ」と公式に発表されたのは、乗艦後の最初の全員集合のおりであったのである。

そして今や決して忘れることのできない瞬間がやって来た。我が機のスロットルは双方とも一杯

に開かれていたので機は激しく震えていた。フラップもいっぱいに下され操縦桿は膝元まで引きつけられていた。艦首に立っていた信号兵の腕がサッと下ろされた――出発の合図だ。

ヨークはブレーキを外した。我が二二四二号機は左車輪を白線に乗せ、空母の甲板をのろのろと転がり始めた。おお神様、何とのろいことか。だが段々速くなって右側の空母の司令塔が視界から消えた時には、我が機の右の翼端は司令塔をわずか二・五メートルへだててかすめたのであった。機は巨大な生物のように空中に跳び上がった。眼下には空母の甲板が消え、波立ち騒ぐ海面が現われた。操縦桿を少し前に押して機の鼻先を少し落して、対気速度を安全圏いっぱいまで上げ、車輪を引き込めた。そしてフラップを上げ、貴重なガソリンを節約するため、スロットルを絞った。馬力を調整し、コンパスをチェックして、やっと一息ついた。今や我々は、夢にも思わなかった「X任務」の一員として東京空襲へと出発したのである。

「離艦、お見事、スキー」とエンジンの唸りをかき消すような大声を張り上げた。「エグリンの基地でやった時と比べてどうだった」

「そんなことが判るものか」とヨークが答えた。そしてかすかに笑って「一度もやったことはなかったんだよ」とつけ加えた。

彼はエグリン基地の滑走路を一二〇メートルに区切って、その中での離陸訓練をしていた飛行機を見たことはあったのだが、彼自身で実際にその距離で離陸したことは一度もなかったのであった。彼にとってはリハーサルなしの全くいきなり本番の離艦であったのだ。

我々は空母から八番目に出発したのだが、どうしたことか、離艦の際には少しもスリルを感じな

かった。我々の前にすでに七機が離艦するのを見ていたし、我々もまた現実に離艦したのだ。その時の感じは今となっては、どうしても思い出せない。ともかく日本までの一二五〇キロを飛んで行くように決められたのであった。私は敢えて「我々」と言うが、我々は皆同じような感じだったと思う。

私はしばらくの間、我々がどうしてこんな立場になったのかなど考えないことにして、ひたすら、計器板、操縦桿、エンジンに気をつかって「どうして」「何故に」こんなことになったのか、という考えを払いのけた。すると今の飛行が過去数百回のB25の飛行の一つで、本国での長距離飛行演習から帰る時の飛行のように思われてきた。ところが下を見ると果てしなく海は拡がっているし、間もなくやってくる現実は違ったものであった。それにしても、爆弾庫の中の「タマゴ」〔爆弾のこと〕や、機銃に装塡されている実弾のことを思い浮べなければ、長距離飛行演習からの帰りを思い起させるのであった。

私はホーネット艦上で求めた、カミソリの刃やキャンディ、数カートンの煙草のことを思い浮べて、一年もの長旅をするかのように、こんなものを買いこんだことを、ひそかに苦笑した。現実は、今、最後の任務についているのだ。恐らくこの任務は今日中に終るだろう。そして帰国の途につけば、数日のうちに国へ帰れるだろう。

ヘルンドンは真正面右側の四分の一直角の方向からの、かなり強い風が吹いているのでそれを修正する方向に進路をとるようにと指示してきた。針路を修正し、対気速度に対して馬力とプロペラ・ピッチをチェックした。すべては時計の針のように運行して行った。補助タンクにはゲージが付

いていなかったので、ガソリン消費量をチェックするにはまだ早かった。ポールは後部坐席で機銃の試射を数発射った。ラーバンは航空士の坐席で発電機のチェックと積荷の整理でおおわらわだった。私は様式Iの用紙に「〇八三五離艦」と記入した。

会話は要領のいい短いものであった。各人は責任を負わされている事項について気をくばっていた。もちろん、この塩からい海水の拡がりのなかでエンジンが止まったらとか、零戦の攻撃を受けたら、という暗い考えが、強行着陸や空中戦のことの想像で心の中に、しばしば浮んできた。

朝の早いうち一面に立ちこめていた雲が朝日の光で払いのけられ青空が見えてきた。青空は北方も東も南も西も——西こそこの時の最大関心事だったが——海と合していたが、それはくっきりした線ではなかった。

ポールが思ったより少々早く、インターホンで最後の缶入りのガソリンを後部補助タンクに移した、と報告してきた。ヨークは、缶はもっと日本に近づいてから、ひとまとめにして捨てるようにせよと指示した。こうすることは、缶が我が機の航跡の道標となることを避けるためだった。つまり、我々の発進の方法及び場所について、何等の証拠を残さないことになる。すると「シャングリラ」〔ルーズベルト大統領が東京空襲隊が何処から発進したかの質問があった時シャングリラからと答えたという架空の地名〕がどこだか何らの手がかりも敵に与えることにはならないのであった。

ガソリンをかなり消費したので積荷の重量の減少に応じて、スロットルとプロペラ・ピッチを調整した。エンジンは気持ちよくブーン、ブーンと唸っていた。景色は全く変化がなかった。読者は、足踏み水車の上にいて、足の下に水が絶えず流れている、という状景を思い浮べてみて下さい。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com